

# 大型シイタケ開発

## 北研が新品種 重量2〜5倍に

シイタケをはじめとするキノコの種菌の生産・販売を手がける北研（栃木県壬生町、川嶋健市社長）は通常のシイタケよりも大型の新品種を開発し、農家向けに発売した。主に業務用として好まれる大型品種の種菌を投入し品ぞろえを拡充することとで、販売のテコ入れを図る。同社は年間に、新品種の種菌約1万5000個の出荷を目指す。

開発したのは「北研715号」。太ぶりに生育した親株同士を交配させ、約3000通りの中から最も商品に適した品種を選び出した。通常のシイタケは1個20g前後だが「715号」は50〜100g程度で、焼きしただけや天ぷらなどへの使い勝手が良いという。肉質を硬くし、日持ちの良さや歯応えも改善。グアニル酸などのうまみ成分の含有量も通常の品種より向上させた。

徳島県などのシイタケ農家に種菌を販売する。「菌床シイタケ」と呼ばれる種類で、おがくずや米ぬかなどにシイタケの菌糸を培養させた培地で作る。シイタケはマイタケやエリンギなどと競合しているうえ東日本大震災の影響や原発事故による風評被害もあり、販売の低迷が続いているという。

北研は、震災の影響や原発事故による風評被害もあり、販売の低迷が続いているという。